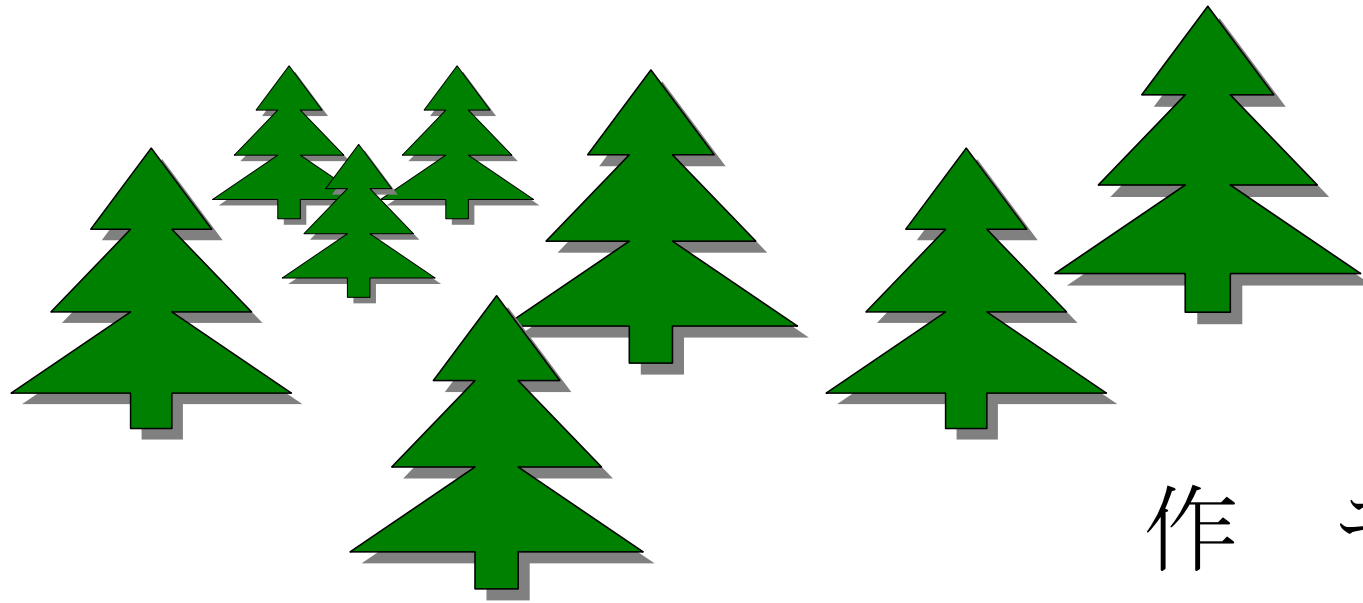


# サンタがやってくる



作 モリ一

# サンタがやってくる

作 モリー

「去年 おれはゲームがほしかったのにちがうものがきたんだよなあ」

「ぼくはグローブをたのんでおいたらちゃんときたよ」

「いいなあおまえたち、オレなんか何もこなかったんだぜ、なんでもお母さんが言うにはいたずらばかりしていたのでこなかったらしい」

「ああ それぼくもきいたことある。サンタさんはお空からいいことリストと悪いことリストをつけているらしいぜ。いいことリストより悪いことリストに多くのつちやうとサンタさんはこないらしい」

「ああ やべーな 今年も」

「なによあんたたち、まだそんな話をしているの」

「ぼっかじゃない サンタさんはねお父さんかお母さんなのよ 知らなかったの」

「そうそう 夜ねむってからこつそりとプレゼントをおいて、サンタがきた！なんていって私たちをだましているのよ」

「だれもサンタさんを見て確かめた人もいないのよ」

「まだまだあんたたちは子どもね、ベビーちゃん」

「なに言ってるんだよ。サンタさんは本当にいるんだぜ。オレは小さい頃ちゃんとこの耳で鈴の音をきいたんだもんね、シャンシャンシャンっていい音だったなあ」

「オレなんか枕元におちっていたサンタさんの白いひげを一本もってるんだぞ。それに毎年ちゃんとプレゼントをもらってるし」

「毎年、今年もがんばったねとサンタさんが褒美をくれるんだってお里のばあちゃんがいつてたよ」

「空のどこからかずつとぼくたちのことを見ているんだ えんとつがなければ窓を少し開けておくんだぜ」

「バカバカしい、いつまで子どものままなのかしら。なら今晚確かめてみればいいじゃない」

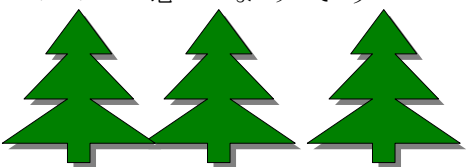
今日のお弁当の時間中こんな話をしていた。あきらは今までそんなことを考えてもいなかった。毎年クリスマススイブになると靴下をさげてほしいものを手紙に書いてねむる。そうすると次の日の朝ちゃんとプレゼントがおかれています。サンタさんはいるもんだと思っていた。でもあらためて考えてみるといったいサンタってどんな人なのだろうか不思議に思えてきた。なぜぼくのほしいものを知っているのだろうか。どうやってぼくの部屋へはいつてくるのだろうか。お父さんやお母さんに泥棒と間違えられておっかけられないのだろうか。ほんとうに空をとんでくるのだろうか。

今までのぼくにはそんなことはどうでもよかった。毎年12月24日になるとサンタさんに手紙をかくてくつしたに入れて布団にはいる。あのわくわくした気持ちかたまらない。ねむるのもつたいたい「一分一秒でもはやく朝がきてほしい。わくわくわくわく、わくわくわくわく胸のおくからわきあがってくるこの気持ちを大きなふろしきで包み込みながらねむる。すごく幸せな気分。そして朝目ざめた瞬間に枕元をみる。ガバツと超早わざだ。すると赤いリボンのかかった箱をみつめる。心の中のオーケストラが「威風堂々」の演奏をはじめ。その瞬間がたまんねー。すでにサンタがどうのという疑問はすでにぼくの頭の中から毎年消去されていた。

でもよくよく考えてみてもサンタクロースはやっぱり現実的ではない。どう考えても不可能、無理。まして世界中の子どもたちにプレゼントを配るなんてありえない。しかもだれもその姿をみることがないなんてあやしい。やっぱり12歳にもなったぼくはそんなことを信じるわけにはいかない。そんなありえないことを言っつて、大人はぼくたち子どもをばかにしている。

そう思うと今までサンタのことを疑問にも思わなかった自分がはずかしく思えるようになった。そして腹立たしささえおぼえてきた。

そういえばクリスマススイブの夜、妙にお母さんとお父さんはにこにこしていたなあ。やっぱりみんなの言うとおりのサンタはお母さんなのかもしれない。いやぜっつたいそうだ。



あきらは決心した。今年はサンタの正体をあばいてやる。今日家に帰ったらお母さんに

「私はサンタの正体を知っている。それはあなただ!!」

とサンタのうそ事実をつきつけてやろう。そして

「いつまでも子どもあつかいするな!」

といっつてやろう。ぼくはもうだまされないぞ。もうぼくは大人なんだ。そうすれば正体がばれたサンタは今年からぼくの家にはこなくなるはずだ・・・。

家に帰ると弟のサトシがうれしそうに準備をしていた。

「なあサトシ、あしたはクリスマスだよなあ」

「うん ぼく妖怪ウオッチ赤団をたのむんだよ。前からほしかったんだよねえ それに友達のおつし君だっつて持つてるんだ」

「なあサトシ、いいこと教えてやろうか」

「何? お兄ちゃん」

「あのかな よく聞けよ。サンタさんなんてな、ほんとはいないんだぞ。あれはお父さんとお母さんなんだぞ」

「ふうーん」

そう返事しながらもサトシはまたサンタさんへの手紙をせっせと書き始めた。

「ねえねえお兄ちゃん、どっちの封筒がいいかなあ。サンタさんこの字よめるかなあ。きつと読めるよね」

そう言っつたかと思っつと手紙をていねいに折り込んで封筒のなかにしまいこんだ。そしていそいでダンスをあけて赤いくつしたを片いつぽうとつてきた。

ふん! ぼくは、今年の手紙を書かない。いや書くもんか。

「ねえねえお兄ちゃん、このくつしたときつとサンタさんは見つてくれるよね」

「だからなサトシ、サンタさんというのはお母さんとお父・・・」

「ねえねえお兄ちゃん、これどこかけとけばいい」

「だからあ、サンタさんは・・・」

「ねえねえここだとサンタさんは気づいてくれるよね」

そういつつサトシは手紙の入った赤いくつしたを大切そうにベッドの柱にぶら下げている。ほんとにサトシはまだ子どもなんだから。ベビーちゃんね。

台所では今日はめずらしく早く帰ってきたお父さんとお母さんが夕飯のしたくをしていた。お父さんなんか時折笑いながら鼻歌まじりでなんだかいつもより楽しそう。

「あら あきら。あしたはクリスマスね。今年もサンタさんがくるといいね」

ぼくに気がついたのでお母さんがにこにこして言っつた。

「あきらは何をお願いしたんだ。ラジコンヘリがほしいって言ってたよなあ」お父さんもここにこ顔だ。

「もうしらじらしいんだから、ぼくはもうサンタの正体は知ってるんだ。夜になってお母さんたちがプレゼントをもつてやってきたときにむくつと起き上がってやるんだ。そしてよいよ正体をあばいてやるんだ。ふっふっふっ ざまあみろ」

「お母さん 明日がたのしみだねえ。きっと明日の朝はここにこ顔のあきらやサトシに会えるよね」

お父さんがお母さんに言った。

「そうねお父さん、ふたりにサンタさんがくるといいですね。今年も楽しいすてきなクリスマスになりそうね うれしいわ」

お父さんがクリスマスソングを口ずさみだした。

ふたりの様子を見ているとなんだかぼくまでうれしく楽しい気持ちになってきた。

夕飯はぼくの大好きなチキンにポテト。

「あきら、これならべてくれる」

「はい」

大きなチキンにポテト、それにろうそくがたっているケーキまである。

「お母さん、ろうそくに火をつけるね」

「あきらはまだ六年生だから自分で火をつけられるね。たのんだよ」

「うん、まかせといて」

ろうそくに火をつけ終わってからあきらは大きな声でサトシをよんだ。

「おおい、サトシ。今日はクリスマスパーティーだぞー。早く来ないとサンタさんがこなくなるぞおーい。」

「はあーいーい」

ジングルベル ジングルベル サトシは大きな声で歌いながらやってきた。

みんなが集まるとお父さんが言った。

「さあ 家族みんなで クリスマスパーティーだ」

ぼくはクラツツカーを思いっきり鳴らした。

パーン

ろうそくの火の光の中で、ワアーーーーッと家族みんなで拍手した。

みんなの笑顔がろうそくの炎でゆらゆらゆれていた。

「お兄ちゃん、今日は早く寝ようね。だってサンタさんが空からぼくやお兄ちゃんの所に来られなくなったら大変だからね。」

「うん。サトシ、今日の夜はいつしよに寝ようぜ」

「わーい、今日はお兄ちゃんと寝るぞ」

まっかなおはなの トナカイさんは・・・いつの間にかぼくも歌っていた。

「そうだ、ぼくもはやくサンタさんへ手紙を書かなくっちゃ。」

